

## 地域の高齢者における友人の獲得とつながりの維持に関する縦断研究

オカモト ヒデアキ  
岡本 秀明\*

**目的** 地域の高齢者のつながりづくりやつながりの維持に関して友人に焦点をあて、縦断調査データを用いて、友人を獲得している者、友人と会う機会を維持している者、親しい友人・仲間をもち続けている者の特性の3点を明らかにすることを目的とした。

**方法** 千葉県都市部4市に在住する高齢者(65~79歳)2,000人を無作為抽出し、初回調査を2010年に、追跡調査を2013年に実施した。分析対象者数は、610人であった。分析には、二項ロジスティック回帰分析を用いた。従属変数は、友人を獲得している者の特性の検討では、初回調査時に友人の獲得がない者のみを抽出し、追跡調査時における友人の獲得の有無とし、友人と会う機会を維持している者の検討では、初回調査時に友人と会う機会がある者のみを抽出し、追跡調査時における友人と会う機会の有無とし、親しい友人・仲間をもち続けている者の検討では、初回調査時に親しい友人・仲間がいる者のみを抽出し、追跡調査時における親しい友人・仲間の有無とした。

**結果** 二項ロジスティック回帰分析の結果、友人を獲得している者の特性は、人間関係を広げる志向の得点が高い、趣味の会等仲間内の活動をしている、学習の場に参加している、であった。友人と会う機会を維持している者の特性は、人間関係を広げる志向の得点が高い、趣味の会等仲間内の活動をしている、老人クラブ活動をしている、であり、外出や活動参加に誘われるに有意傾向( $p < 0.1$ )がみられた。親しい友人・仲間をもち続けている者の特性は、人間関係を広げる志向の得点が高い、趣味の会等仲間内の活動をしている、学習の場に参加している、であり、女性に有意傾向がみられた。

**結論** 友人の獲得、友人と会う機会の維持、親しい友人・仲間の維持のそれぞれの関連要因が明らかになり、これらすべてに共通していた関連要因は、人間関係を広げる志向が強い、趣味の会等仲間内の活動をしていることであった。

**キーワード** 社会的ネットワーク、友人関係、友人の獲得、つながりの維持、高齢者、縦断研究

### I はじめに

よりよい超高齢社会の実現を目指して、さまざまな取り組みが必要とされている。そのなかで、社会的孤立や孤立死を防止する取り組み、地域における社会活動の担い手として高齢者の活動参加を促進する取り組みも必要となる。こ

れらを推進するためのキーワードとして、つながりづくり、つながりの維持、換言すれば、社会的ネットワークの形成・維持があげられる。

本研究では、社会的ネットワークのなかで、高齢者の非親族ネットワーク、具体的には、友人に焦点をあてる。その理由は、第1に、社会的孤立や孤立死の防止において、友人が人的資源として大切な存在の1つになるからである。高齢者がいる世帯のなかで、2012年現在、単独

\*和洋女子大学生生活科学系准教授

世帯が23.3%，夫婦のみ世帯が30.3%を占めている<sup>1)</sup>。夫婦のみ世帯であっても、非親族ネットワークが希薄であれば、配偶者を喪失すると孤独死予備軍になる可能性がある<sup>2)</sup>。第2に、地域における高齢者の社会活動への参加は、他者とのつながりの形成や維持をもたらし、生きがいづくりや介護予防に寄与し、高齢者が高齢者を支える活動も展開されるであろうが、社会活動への参加促進の鍵となるのが友人の存在だからである。内閣府の高齢者調査によると、活動に参加するきっかけになることとして「友人・仲間のすすめ」、社会活動に参加して良かったこととして「新しい友人を得ることができた」との回答が最も多く、地域の奉仕活動参加のための必要条件として「一緒に活動する仲間がいること」が2番目に多い<sup>3)</sup>。第3に、高齢期のネットワーク研究に関して、わが国では家族や親族に限定した研究が多く、友人などを対象とした研究が少ないためである<sup>4)</sup>。

友人の獲得は、「つながりづくり」が実現したことを示す重要なアウトカムである。高齢期における友人の獲得に言及した研究をみると、Bowlingらは、友人がいない者のうち、3年後に友人数が1～3人になった者が30%，4人以上が4%としている<sup>5)</sup>。Johnsonらは、高齢期においても友人を獲得した者が半数程度いたことを報告している<sup>6)</sup>。

友人の獲得の研究において、その関連要因の検討に焦点をあて、かつ特定の活動や教室参加ではなく地域高齢者全般を対象としたものはほとんどみられなかった。そこで筆者は2つの研究を実施し、高齢期においても2割強の者が友人を獲得していたこと<sup>7,8)</sup>、友人を獲得した者の特性として、変化や新しさを伴う活動的志向が高い、SOC(首尾一貫感覚；Sense of Coherence)が高い、学歴が高い<sup>7)</sup>、また、老人クラブ活動をしている、趣味の会等仲間内の活動をしている、友人とのつきあいが活発、外出や活動参加への誘いがあることを明らかにした<sup>8)</sup>。しかしながら、これらの研究<sup>7,8)</sup>は横断研究であるため、友人の獲得の有無とその検討要因との間の因果関係に言及できないことが課題である。そのた

め、縦断研究に取り組む必要がある。

友人とのつながりの維持に関して、縦断研究では、友人との接触頻度（電話や手紙も含む）について、有意に減少したこと<sup>9,10)</sup>、3年間に減少した者と変化なしの者をあわせると9割近くに達していたこと<sup>9)</sup>、分析対象者の平均年齢における接触頻度は、男性より女性のほうが多く、学歴が高い者のほうが多いこと<sup>10)</sup>が報告されている。わが国では、斉藤が社会的ネットワークの経年的変化を検討し、6年間の3時点間の親しい友人数に有意差がなかったとしている<sup>11)</sup>。友人とのつながりの維持に関する研究は、特にわが国において、縦断調査データに基づいて関連要因の検討に焦点をあてた研究が極めて少ない。

以上のことから、本研究では、高齢者のつながりづくりやつながりの維持に関して友人に焦点をあて、縦断調査データを用いて、友人を獲得している者、友人と会う機会を維持している者、親しい友人・仲間をもち続けている者の特性の3点を明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ 方 法

### (1) 調査の対象と方法

千葉県都市部4市(市川市、浦安市、船橋市、習志野市)に在住する65から79歳までの者2,000人(各市500人)を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査により、初回調査を2010年9～10月に、追跡調査を2013年9～10月に実施した。調査対象者は、住民基本台帳から無作為抽出した。初回調査の有効回答(割合)は、1,067人(53.4%)であった。このうち、代理回答ではなく、基本的な項目に欠損値がない997人に追跡調査を実施し、有効回答(割合)は717人(71.9%)であった。本研究では、代理回答ではなく、初回調査と追跡調査のいずれにおいてもIADL(Instrumental Activities of Daily Living；手段の日常生活動作)が自立し、友人の獲得項目に欠損値のない610人を分析対象者とした。

調査の倫理的配慮に関して、回答データは統

計的処理を行い個人の特定をしないこと、対象者の情報は厳重に管理していること、調査協力が困難な場合には返送しないでよいこと、協力が得られる場合には調査票を無記名で返送願いたいことを調査協力文書に明記し、調査票の返送をもって調査協力の同意とみなした。

## (2) 分析に使用した変数

### 1) 友人の獲得とつながりの維持

友人の獲得、友人と会う機会、親しい友人・仲間の3変数とした。いずれも初回調査と追跡調査でたずね、あり、なしを把握した。友人の獲得は、今年(調査時)になって新しく友人ができたかどうかをたずねた。

### 2) 関連を検討した変数

初回調査でたずねた以下の11変数を、関連を検討する変数として設定した。

基本的な属性は、年齢、性別(女性=0, 男性=1)、家族形態(独居を基準とし「夫婦のみ」「その他」の2つのダミー変数)、経済的暮らし向き(苦しい=0, ふつう・ゆとりあり=1)の4変数とした。

人間関係を広げる志向は、人間関係を広げたいと思うかをたずね、とてもそう思う=4, まあそう思う=3, あまりそう思わない=2, まったくそう思わない=1として得点化した。居住地域への愛着意識は、現在住んでいる地域にどのくらい愛着があるかをたずね、とても愛着がある=5, やや愛着がある=4, どちらともいえない=3, あまり愛着がない=2, まったく愛着がない=1として得点化した。

社会活動は、趣味の会等仲間内の活動、町内会・自治会活動、老人クラブ活動の3変数とし、している=1, していない=0とした。学習の場への参加は、高齢者大学、高齢者向け教室、市民講座、各種研修会・講演会への参加状況をたずね、参加あり=1, 参加なし=0とした。外出や活動参加に誘われるは、一緒に出かけたり一緒に何かのイベントや活動に参加しませんかと誘われることがあるかをたずね、あり=1, なし=0とした。

## (3) 分析方法

二項ロジスティック回帰分析を用いて分析し、独立変数は、関連を検討した変数として先述した11変数を強制投入した。

従属変数に関して、友人を獲得している者の特性を検討する分析では、初回調査時に友人の獲得がない者のみを抽出し、追跡調査時に友人の獲得がある者=1, ない者=0とした。友人と会う機会を維持している者の特性を検討する分析では、初回調査時に友人と会う機会がある者のみを抽出し、追跡調査時に友人と会う機会がある者=1, ない者=0とした。親しい友人・仲間をもち続けている者の特性を検討する分析では、初回調査時に親しい友人・仲間がいる者のみを抽出し、追跡調査時に親しい友人・仲間がいる者=1, いない者=0とした。

なお、独立変数間の相関係数(スピアマンの順位相関係数)を確認したところ、最も相関が高かった変数間においても0.371であったため、多重共線性の問題はないと判断している。

## Ⅲ 結 果

初回調査時における分析対象者の特性を表1に示した。

友人の獲得の有無、友人と会う機会の有無、親しい友人・仲間の有無に関する経時変化を表2~4に示した。友人の獲得は、初回調査時において「あり」が150人、「なし」が460人であった。初回調査時に「なし」の460人(100.0%)のなかで、追跡調査時に「あり」は54人(11.7%),「なし」は406人(88.3%)であった(表2)。友人と会う機会は、初回調査時において「あり」が568人、「なし」が34人であった。初回調査時に「あり」の568人(100.0%)のなかで、追跡調査時に「あり」は543人(95.6%),「なし」は25人(4.4%)であった(表3)。親しい友人・仲間は、初回調査時において「あり」が560人、「なし」が39人であった。初回調査時に「あり」の560人(100.0%)のなかで、追跡調査時に「あり」は528人(94.3%),「なし」は32人(5.7%)で

あった。

二項ロジスティック回帰分析の結果を表5に示した。初回調査時に友人の獲得がなかった者のなかで、追跡調査時に友人の獲得があった者の特性は、人間関係を広げる志向の得点が高い

( $p < 0.01$ )、趣味の会等仲間内の活動をしている ( $p < 0.05$ )、学習の場に参加している ( $p < 0.05$ ) であった。初回調査時に友人と会う機会があった者のなかで、追跡調査時においても友人と会う機会があった者の特性は、人間関係を広げる志向の得点が高い ( $p < 0.05$ )、趣味の会等仲間内の活動をしている ( $p < 0.05$ )、

表1 初回調査時における分析対象者の特性 (n=610)

	人数 (%)
年齢	
平均値±標準偏差	70.7±3.8
性別	
男性	310(50.8)
女性	300(49.2)
家族形態	
独居	69(11.3)
夫婦のみ	286(47.0)
その他	254(41.7)
経済的暮らし向き	
ふつう・ゆとりあり	528(86.8)
苦しい	80(13.2)
人間関係を広げる志向	
平均値±標準偏差	2.7±0.7
居住地域への愛着意識	
平均値±標準偏差	4.1±0.8
趣味の会等仲間内の活動	
している	409(67.5)
していない	197(32.5)
町内会・自治会活動	
している	331(54.6)
していない	275(45.4)
老人クラブ活動	
している	107(17.6)
していない	502(82.4)
学習の場への参加	
参加あり	260(43.0)
参加なし	345(57.0)
外出や活動参加に誘われる	
あり	396(65.2)
なし	211(34.8)

注 表1, 3, 4について各項目で欠損値がある場合はn=610と  
ならない。

表2 友人の獲得の有無の経時変化

(単位 人, ( )内%)

	合計	追跡調査時	
		獲得あり	獲得なし
初回調査時			
獲得あり	150(100.0)	73(48.7)	77(51.3)
獲得なし	460(100.0)	54(11.7)	406(88.3)

表3 友人と会う機会の有無の経時変化

(単位 人, ( )内%)

	合計	追跡調査時	
		機会あり	機会なし
初回調査時			
機会あり	568(100.0)	543(95.6)	25(4.4)
機会なし	34(100.0)	13(38.2)	21(61.8)

表4 親しい友人・仲間の有無の経時変化

(単位 人, ( )内%)

	合計	追跡調査時	
		あり	なし
初回調査時			
あり	560(100.0)	528(94.3)	32(5.7)
なし	39(100.0)	9(23.1)	30(76.9)

表5 友人の獲得および友人とのつながりの維持に関連する要因

	友人の獲得	友人と会う機会の維持	親しい友人・仲間の維持
	オッズ比 (95%信頼区間)	オッズ比 (95%信頼区間)	オッズ比 (95%信頼区間)
年齢	0.93(0.85-1.02)	1.10(0.97- 1.25)	0.94(0.85- 1.04)
性別 (0 = 女性)	1.02(0.52-1.99)	0.56(0.21- 1.49)	0.44(0.18- 1.08)†
家族形態 (0 = 独居)			
夫婦のみ	0.78(0.28-2.23)	0.83(0.17- 4.16)	0.49(0.13- 1.92)
その他	0.57(0.19-1.66)	1.57(0.29- 8.63)	1.57(0.34- 7.28)
経済的暮らし向き (0 = 苦しい)	1.04(0.36-2.97)	1.44(0.47- 4.43)	2.00(0.72- 5.55)
人間関係を広げる志向	2.07(1.24-3.45)**	2.54(1.20- 5.36)*	2.01(1.03- 3.91)*
居住地域への愛着意識	0.71(0.46-1.09)	1.07(0.63- 1.82)	1.23(0.75- 2.02)
趣味の会等仲間内の活動	2.79(1.18-6.59)*	2.84(1.03- 7.82)*	2.66(1.09- 6.52)*
町内会・自治会活動	1.49(0.73-3.02)	0.74(0.28- 1.99)	2.19(0.79- 6.06)
老人クラブ活動	0.55(0.22-1.35)	0.24(0.06- 0.97)*	0.70(0.13- 3.74)
学習の場への参加	2.09(1.07-4.08)*	2.86(0.81-10.05)	3.90(1.05-14.45)*
外出や活動参加に誘われる	1.70(0.77-3.76)	2.55(0.94- 6.91)†	1.39(0.58- 3.29)
モデル $\chi^2$ (df)	41.90(12)***	34.47(12)**	57.58(12)***

注 \*\*\* $p < 0.001$ , \*\* $p < 0.01$ , \* $p < 0.05$ , † $p < 0.1$

老人クラブ活動をしている ( $p < 0.05$ ) であった。なお、有意傾向 ( $p < 0.1$ ) として、外出や活動参加に誘われるという特性がみられた。初回調査時に親しい友人・仲間がいた者のなかで、追跡調査時においても親しい友人・仲間がいた者の特性は、人間関係を広げる志向の得点が高い ( $p < 0.05$ )、趣味の会等仲間内の活動をしている ( $p < 0.05$ )、学習の場に参加している ( $p < 0.05$ ) であった。また、有意傾向 ( $p < 0.1$ ) として、女性という特性がみられた。

#### IV 考 察

本研究では、高齢者のつながりづくりやつながりの維持に着目し、友人に焦点をあてた。縦断調査データを用いた分析の結果、友人の獲得、友人と会う機会の維持、親しい友人・仲間の維持のすべてに共通していた要因は、人間関係を広げる志向が強い、趣味の会等仲間内の活動をしていることであった。この結果に関して、西下は、親しい友人がいる高齢女性の特性として、「ひとりで気楽に生きる生活」ではなく「友人や知人とできるだけ多くつきあう生活」に重点を置いていること、趣味の数が多いこと<sup>12)</sup>、小田は、友人数が多い者の特性として、社交性を示す<sup>13)</sup>「積極的親密性」や各種クラブやサークルなどへの「参加・活動度」得点が高いこと<sup>14)</sup>を報告しており、人間関係や趣味に関する活動に対する積極性が重要なことがうかがえる。

社会活動のなかで、町内会・自治会活動はいずれの分析においても関連がなかった。町内会・自治会活動は、趣味の会等仲間内の活動や老人クラブ活動と異なり、その地域居住者の自動的な加入が期待され、その地域の問題に対処するために誰かがやらなければならないという義務的な要素が強い<sup>8)</sup>。町内会・自治会活動の関連要因として、他者・地域貢献意識が関連していた一方で、親しい友人・仲間数は関連がなかったことが報告されている<sup>15)</sup>。これらが示すように、町内会・自治会活動は、居住地域に対する貢献的な活動であり、友人ではなく近隣住

民とのつながりづくりや維持をもたらす活動であるため、このような結果になったと推察される。

老人クラブ活動への参加と友人の獲得の関連は、筆者の横断研究では関連があったが<sup>8)</sup>、縦断研究である本研究では関連がなかった。この異なる結果をもたらした可能性として、第1に、横断研究では因果関係についていえないこと、つまり、友人の獲得よりも時間的に先行する老人クラブ活動状況のデータ把握ができなかったこと、第2に、本研究は3年間の縦断研究であるため、老人クラブで気の合うメンバーとはすでに友人となっており、3年後の追跡調査時点では新たに友人となり得るメンバーがほとんど残っていなかったこと、第3に、本研究では初回調査時に友人の獲得がない者のみを抽出して分析対象としたことが考えられる。

学習の場への参加は、友人の獲得、親しい友人・仲間の維持に効果を示した。内閣府の調査で、生涯学習をしている理由について高齢者の回答をみると、「他人と親睦を深めたり友人を得るため」の割合が高い<sup>16)</sup>。老人大学や元気体操教室において友人を得た者が多いことも報告されている<sup>17)18)</sup>。学習の場は学ぶ場であるが、他者と共に学ぶなかで友人を得たり関係の維持をもたらすこと、参加者によっては学ぶことよりも友人や仲間を得たり親睦を深めることを重視している場合もあるだろうから、このような結果になったと考えられる。友人と会う機会の維持には関連がなかったのは、友人と会う場の設定は、一般的に、学習の場ではなく、友人と会う目的で個別に設定したり、仲間内の活動の場が活用されるからだと思われる。

分析結果のなかで、5%の有意水準には達しなかったが、有意傾向 ( $p < 0.1$ ) がみられたものについて述べる。外出や活動参加に誘われることが友人と会う機会を維持する傾向にあったのは、誘いのなかに友人からのものもあり、その友人と会うことが、この結果につながったことが推察される。親しい友人・仲間がいる状態を維持する傾向は、女性にみられた。内閣府による高齢者を対象とした複数の意識調査によ

ると、親しい友人・仲間がいない者の割合は、男性6.3%、女性4.3%<sup>19)</sup>、また、男性4.6%、女性3.7%<sup>20)</sup>と、いないとの回答は女性よりも男性のほうがわずかながら高い。孤立状態にある独居高齢者は女性よりも男性のほうが多い<sup>21)</sup>、配偶者と死別後に新たに隣人、友人、知人を得た者の割合は男性よりも女性のほうが多い<sup>22)</sup>といった、友人などとのつながりの維持に関して男性よりも女性のほうが有利なことを示す結果もみられる。今後の研究において、男女差があるのかの解明が求められる。

本研究の限界について、調査対象は千葉県都市部4市の高齢者であった。他の地域においても同様の結果が得られるかについては言及できない。

本研究は科学研究費補助金(22730444)の助成を受けて行った。

## 文 献

- 1) 内閣府. 平成26年版高齢社会白書, 高齢者の家族と世帯. ([http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/pdf/1s2s\\_1.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/pdf/1s2s_1.pdf)) 2014.8.6.
- 2) 中沢卓実. まえがき:「ないないづくし」が孤独死予備軍. 中沢卓実, 結城康博編著. 孤独死を防ぐ: 支援の実際と政策の動向. 京都: ミネルヴァ書房, 2012. i-ii.
- 3) 内閣府. 平成25年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果, 調査票と単純集計結果. (<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai/pdf/s3.pdf>) 2014.8.6.
- 4) 杉澤秀博. 高齢期の家族・友人. 柴田博, 長田久雄, 杉澤秀博編. 老年学要論: 老いを理解する. 東京: 建帛社, 2007: 218-24.
- 5) Bowling A, Grundy E, Farquhar M. Changes in network composition among the very old living in inner London. *Journal of Cross-Cultural Gerontology* 1995; 10(4): 331-47.
- 6) Johnson CL, Troll LE. Constraints and facilitators to friendships in late late life. *The Gerontologist* 1994; 34(1): 79-87.
- 7) 岡本秀明. 地域における高齢者の社会的ネットワーク形成要因および心理的well-being: 新たな友人の獲得に着目して. *厚生*の指標 2014; 61(3): 8-14.
- 8) 岡本秀明. 地域における高齢者のインフォーマルな社会的ネットワーク形成に関連する要因: 友人・知人の獲得に着目して. *社会福祉学* 2014; 55(2): 11-26.
- 9) Krause N. Assessing change in social support during late life. *Research on Aging* 1999; 21(4): 539-69.
- 10) Shaw BA, Krause N, Liang J, et al. Tracking changes in social relations throughout late life. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 2007; 62B(2): S90-9.
- 11) 齊藤雅茂. 高齢者の社会的ネットワークの経年的変化: 6年間のパネルデータを用いた潜在成長曲線モデルより. *老年社会科学* 2008; 29(4): 516-25.
- 12) 西下彰俊. 高齢女性の社会的ネットワーク: 友人ネットワークを中心に. *社会老年学* 1987; 26: 43-53.
- 13) 小田利勝. 高齢者の日常的コンピテンス/ライフ・スキルの測定尺度の開発とその利用. *神戸大学発達科学部研究紀要* 2002; 10(1): 271-307.
- 14) 小田利勝. 都市高齢者の友人関係に関する一考察. *神戸大学発達科学部研究紀要* 2003; 10(2): 491-502.
- 15) 岡本秀明. 町内会・自治会活動, ボランティア活動, 友人・近隣援助活動の関連要因とその主観的効果: 地域福祉推進に関するインフォーマルな活動に参与する高齢者に着目して. *日本の地域福祉* 2014; 27: 55-67.
- 16) 内閣府. 生涯学習に関する世論調査(平成24年7月調査), 集計表3(Q2SQa1)生涯学習をしている理由. (<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-gakushu/table/PH2403003.csv>) 2014.8.8.
- 17) 堀薫夫. 老人大学修了者の老人大学への評価と社会参加活動の関連: 大阪府老人大学を事例として. *老年社会科学* 2007; 29(3): 428-36.
- 18) 柿本真弓, 大田さくら. 高齢者における音楽体操のもたらす効果. *福岡大学スポーツ科学研究* 2012; 42(2): 53-71.
- 19) 内閣府. 平成21年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果, 基本的生活に関する事項. (<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h21/sougou/zentai/pdf/p9-45.pdf>) 2014.8.11.
- 20) 内閣府. 平成22年度高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査結果, 基本的生活. (<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/sougou/zentai/pdf/2-1.pdf>) 2014.8.11.
- 21) 齊藤雅茂, 冷水豊, 山口麻衣, 他. 大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴. *社会福祉学* 2009; 50(1): 110-22.
- 22) Lamme S, Dykstra PA, Broese van Groenou MI. Rebuilding the network: New relationships in widowhood. *Personal Relationships* 1996; 3(4): 337-49.